

2004年度 信州大学山岳会

無雪期報告書



SAC
表紙 片岡

目次

蝶・常念 P2~

八ヶ岳 one day P3~

高原川・末上谷 P7~

餓鬼・燕 P8~

トルミス米 P11~

北岳バトル P13~

屏風岩 P15~

北アイルワース丁走 P17~

1年生山行 P31~

高原川赤谷 P35~

編纂集後記 P37~

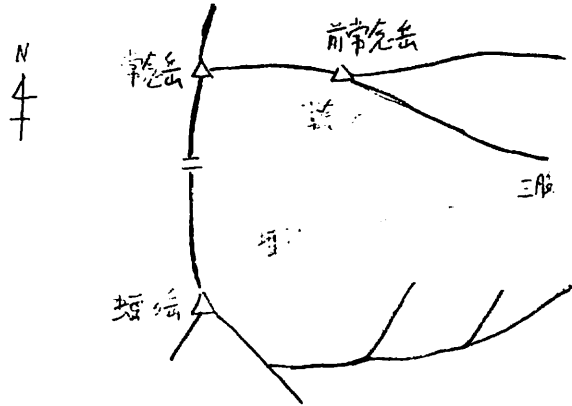
6/5 蝶ヶ岳・常念岳

パーティー

PL: 高橋 昭彦 (会2 農2)

佐山 鉄平 (会1 理3)

概念図



行動記録

2:00 ~ 4:50 ~ 5:10 ~ 8:10 ~ 9:00 ~ 10:50 ~ 12:35 ~ 16:00

BOX 三股登山口 水場 前常念 常念岳 雪渓装備着 蝶ヒュッテ 下山

車を持っているにもかかわらず前日の夜に自転車でアプローチすることに決定。自分で言い出すが、やはり不安はあった。しかし、行ってみたらなんて事はない。雲ひとつない快晴の下で汗をかき、そよ風に当たりながら昼寝をした。他の登山客から「蝶の雪形が見ごろだ」と聞かされて帰りに見ようとしたが、逆光のため全く見る事が出来なかった。

文責: 佐山 鉄平

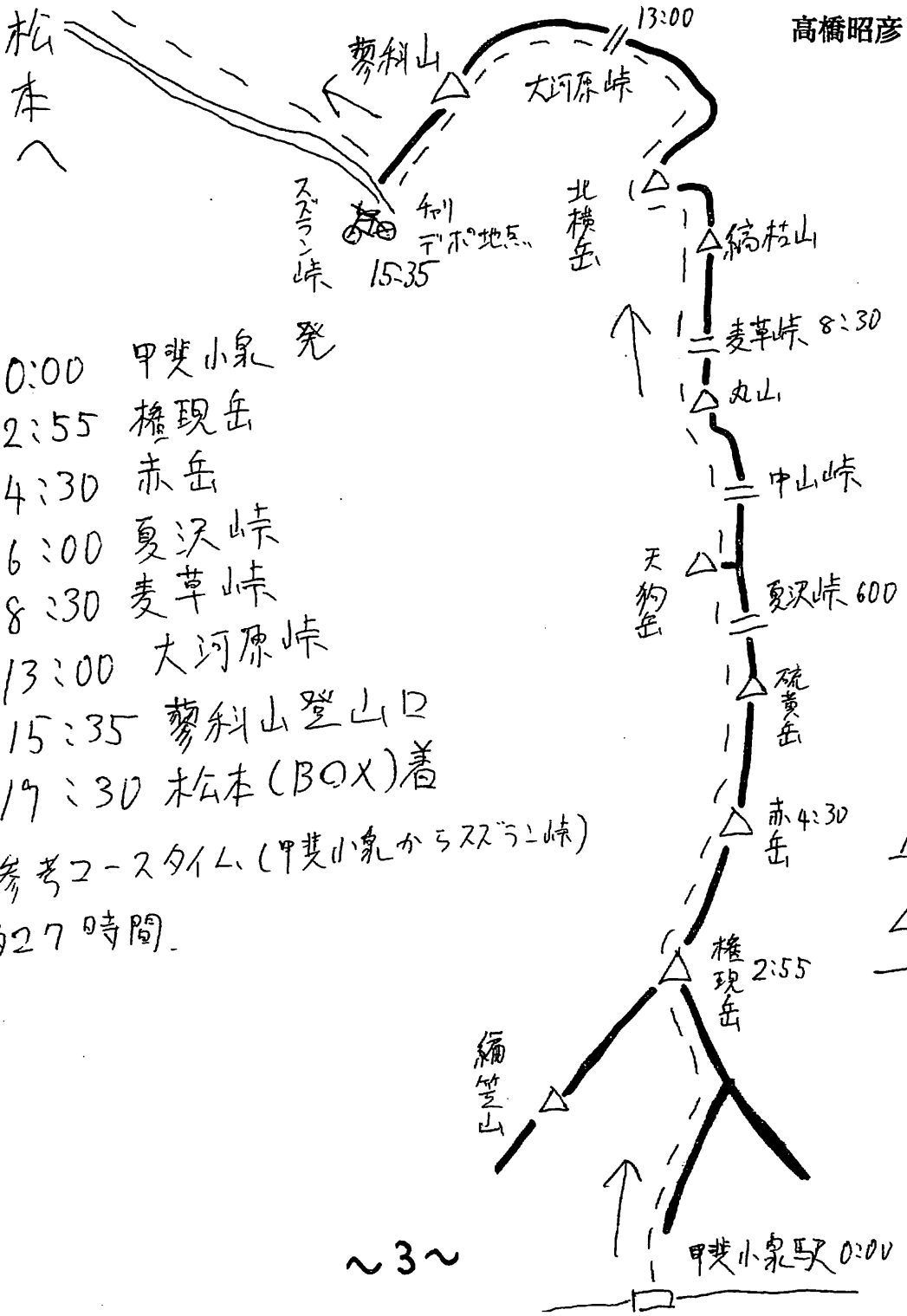


~2~

Project Summertime Traveler 第1弾

夏空に駆ける～八ッ岳 1day ascent～ 6/12.13

高橋昭彦



- 0:00 甲斐小泉 発
- 2:55 権現岳
- 4:30 赤岳
- 6:00 夏沢峠
- 8:30 麦草峠
- 13:00 大河原峠
- 15:35 藜科山 登山口
- 19:30 松本 (BOX) 着



～3～

クライマーが岩壁にラインを描くというのであれば、ランナーは地図にラインを描く。例えそれが、既成の登山道、しかも夏のどこへでも逃げられる八ッ岳であったとしても、スピードとスタイルによって魂の表現はできる筈だ。

山で「走る」とか、「競技」と聞くと、たちまち嫌悪感を示す人がいる。純粹に山を楽しむ、という観点から見ればそれらは邪道に属するだろう。しかし、それを言う資格のある者は、自分の力で困難を乗り越え、自分で自分を鍛えられる者だけだ。今回は自分にそれを言うことができるのかを問うため、そして、体力の限界を打ち破るための山行である。

既成の登山道を走るのにスタイルも何もないが、麓からゴールの松本まではオール人力という形を取った。自転車については、デポ地点の蓼科山登山口まで漕いでいった。そこからスタート地点までは交通機関を使ってしまったが、これは止むを得ないものと思っている。また、今回は編笠や天狗はカットしたが、これらを加えればより完全な縦走になるだろう。

6/12 8:00 松本発～13:20 蓼科山登山口～ 17:30 甲斐小泉駅

この日は自転車のデポ。しかし、悲しいかな、外は雨。覚悟を決めて出発する。幸い塩尻峠を越えると、雨は止んだ。

茅野から白樺湖に上がり、デポ地点の蓼科山登山口へ。その後はアップも兼ねて(!?) 白樺湖まで走る。そして、バスで茅野まで下り、甲斐小泉へは電車で移動した。

誤算だったのは、駅に水はおろかトイレすらないことだった。大抵の無人駅にはせめてその二つはあるのだが…。幸い近くに公園があったのでそちらに移動するが、ここにもない。ざけんな長坂(ごめんなさい)、と胸中で叫び、その東屋で寝た。

6/13 0:00 スタート～ 2:55 権現岳～ 4:30 赤岳～ 6:30 夏沢峠～ 8:30 麦草峠～ 13:00 大河原峠～ 14:10 蓼科山～ 15:35 蓼科山登山口～ 19:30 松本

準備体操を終えいよいよスタート、という時に雨がぱらついてきた。きっと空が、熱中症になるなよ、と心遣いをしてきているのだろう。もっともそれはすぐ止んでしまったが。

午前零時、出発。これから最も長い長い一日のはじまりだ。まずは権現岳を目指して舗装道を駆け上がる。次第にそれは砂利道、そして登山道に変わって

いく。踏み跡が不明瞭になり、ヘッドラ走行ということもあって何度か迷う。しかし、尾根を上がればいずれはピークなので、ひたすら上を目指す。流石に闇夜の林道は心許無い。三ツ頭の手前からガスってきて、風も出始める。権現でそれはさらに強くなり、たまらずカッパを着る。この辺りでは正直生きた心地がしなかった。しかし、雲の切れ間から見下ろす夜警が非常に美しく、励みにもなった。ここからの下りは、風と岩場のおかげでかなり時間をロスする。早く夜が明けてくれと願わずにはいられなかった。

キレット小屋の辺りで漸く空が明るくなり、風も弱まってきた。ここから赤岳までは爽快そのもので、一番体が動いていた。南部は最高のトレイルランニングで、左右の雲海を横目に快走する。しかし、大タルミへの下りで足首の古傷を痛めてしまい、大幅にスピードダウン。これまでか、と思ったが、軽かったので助かった。

夏沢峠からのだるい登りは、走りと早歩きを繰り返す。しかし、平坦地や下りは苦手なタイプの道だったため、思うように進まない。流石に一筋縄にはいかないようだ。夏沢峠までは貯金を作ってきたが、北八では苦戦を強いられそうだ（Jんぼさんも言っていた）。

麦草峠から先では更に大バテする。晴れるのはいいのだが、暑いたらありゃしない。一番へばっていたのが縞枯から三ツ岳、北横岳を越えて双子池に降りるまで。樹林帯なのに岩場で、非常に神経を使った。おまけに膝が悲鳴をあげてきている。集中力も切れてきたので、双子池でいったん止まる。その後は休んだ甲斐あって飛ばせた。

大河原峠から蓼科山までは一気に登る。天気は快晴。そして、岩屑の山頂には爽やかな風が吹き抜けていく。

今日、私が駆け抜けてきた山並を振り返った。感無量という言葉はこんな時に使うものなんだ、と実感した。

流石にいくら急いでいるとはいえ、この天気の上で下るのは犯罪なので、暫し景色を楽しんだ。そして、最後の下り。ここもガレていてスピードはあまり出せないが、それでも最後まで走る、という気持ちは捨てなかった。

登山口で漸く自転車と再会。ここまでの15時間35分。しかしまだ終わっていない。それでも、もう下界だったので安心してピーナスラインを進む。そして、最後の楽しみ、扉峠からの下りをかっ飛ばす。

立岩に差し掛かる頃、いよいよ日の出から共にいた太陽も沈もうとしていた。今日という日と共に、熱く、激しい旅路も終わる。それでも、旅の終わりに思うことは、いつだって次の旅のことだ。

女鳥羽川を渡って、漸く信大に辿り着く。19 時間 30 分。熱く、激しい、魂の 19 時間半であった。

一つの挑戦が終わった。出発前に BOX に書き残してきた文を読み返し、それが 100% 達成されたとは言い難い。今回は誰もやったことが無かった故に、タイムはあまり気にならなかったが、体力のある人が同じことをやったら更に早くなる、ということを感じた。それでも一時は不可能ではないかと思った計画が達成された、という安堵感を持ったというのも確かだ。今回の挑戦が、また新たな挑戦を創造するだろう。いや、それをしなければ進歩は無い。

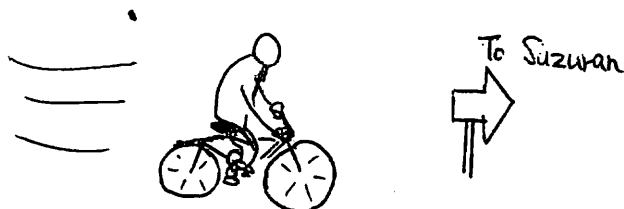
今回は、あくまでも到達点ではなく通過点である。所詮は生命の安全が殆ど保証された、ゲレンデ同然の場所で行われたことだ。夏はこれからだ。これをステップに、更に自分のやりたい山をやっていくつもりだ。

蓼科山の山頂で、今まで駆け抜けてきた稜線を振り返った時の感動。これは、何時八ッ岳の稜線を振り返った時でも、蘇ってくることだろう。しかし、それよりも大きな感動を得るために前進していきたい。脳裏に浮かぶ、あこがれを追って。

最後に、この計画を立てている時に、J んばさん達が以前この計画を立てたということで色々アドバイスを受けた（直前に雪が降ったかで流れたそうですが）。それにより今回の計画は大きく前進することができました。それに感謝すると共に、尊敬するクライマーでもある大先輩がやろうとしたことを、自分でもできたということに大きなよろこびを感じています。

また、声援を下さった方やアドバイスをくれた皆さんにも感謝いたします。

記 高橋昭彦



6/27 高原川・沢上谷 上部

パーティー

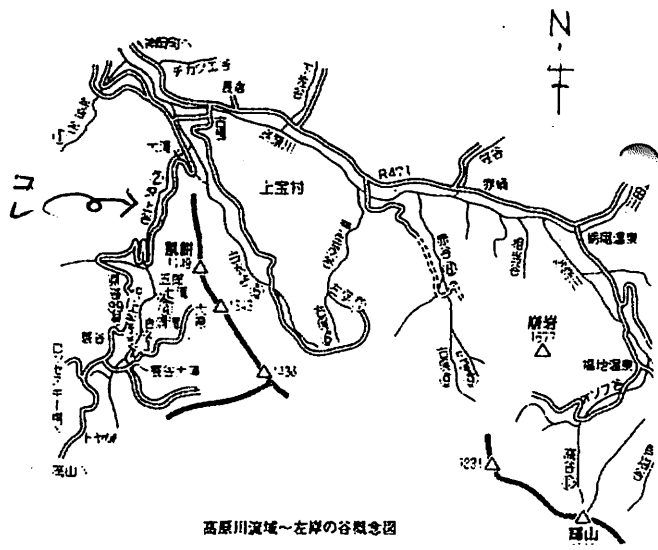
PL: 三森 武志 (会3 理2)

横山 輝生 (学士)

佐山 鉄平 (会1 理3)

山中 豪 (会1 農1)

概念図



行動記録

7:40 林道発

7:20 蒼谷大滝

1:10 逆行終了

2:20 駐車した所

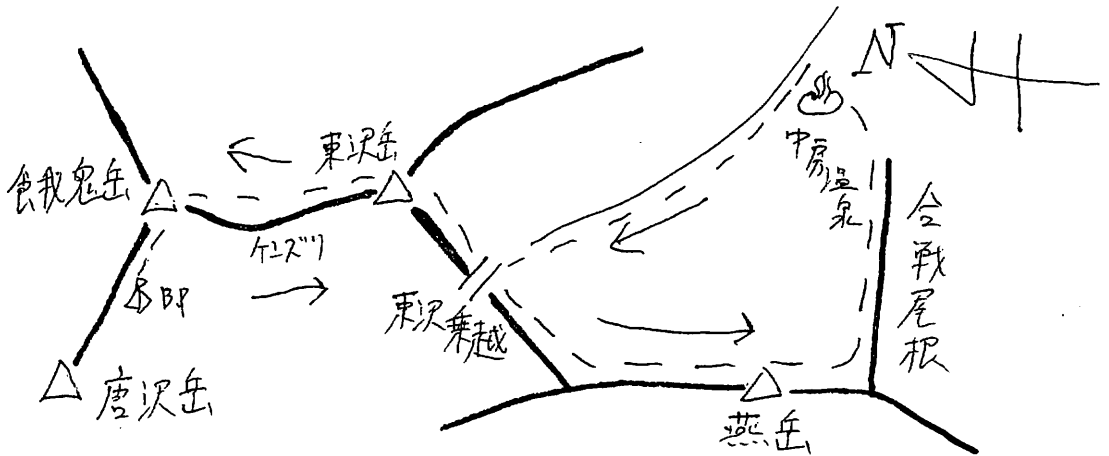
予定では、26・27日で沢上谷・白水谷に入渓するはずだったが、悪天候のため26日を中止して27日に沢上谷に入渓することとなった。一年(自分と山中)は初めての沢で特に真下から見上げた大滝には言葉がなかった。その後、登攀を試みるも、取り付く事すら出来ずに全員が敗退した。大滝を巻いた後は最後まで緩やかなナメ床が続き、短い逆行を終了した。

文責: 佐山 鉄平

雨男、風男!?～餓鬼・燕自転車山行～

7/17,18

メンバー L 高橋昭彦 (会2農2) 片寄哲生 (会4織4) 片岡陽介 (会1理1)
佐山鉄平 (会1理3)



常念・蝶 (三股)、烏帽子・野口五郎 (七倉)、扇沢。挙句の果ては甲斐駒・仙丈や野麦峠 (高谷さんによる) と自転車山行もそろそろネタが尽きて(!?)参りました。しかし、例によって地図を眺めていたところ、ありました。まだ空白の箇所が。それをもってメジャーな所。そんな訳で私高橋と片寄さん。そして、1年のアンチ下ネタ佐山と変態片岡の四人で行って参りました。

7/17 3:20 BOX 発～7:10 中房駐車場～道中ボルダリング～12:05 東沢乗越～16:00 餓鬼岳 B.P

寝不足が自転車山行において一番の大敵なので、少々遅めに出発する。例によってガッシャを背負った怪しい四人組は、夜の町へと消えていった。穂高町のコンビニで一本取る頃にはすっかり明るくなる。ここから中房温泉まで2Pで登るが、核心は坂よりも前後から次々と押し寄せてくる車をよけることであった(特にバスは凶悪)。片岡は唯一ママチャリで、車がきた時はそれで坂を直登していた。天気は時折降ることもあるが、カッパを着るほどのものではなかった。

合戦尾根の入り口には、おじさんおばさんがうじゃうじゃいる。しかし、東沢乗越への登山道に入ると、先程の喧騒が嘘のようだ。その分草の背丈が高く、少々歩きにくい。河原では兩岸がげざられており、何度か渡渉することになる

が問題はない。最後の水場付近にはボルダーがあり、四本ほど課題を登ることができた。あえて持ってきたクレッタが大活躍であった。しかし、一年二人は山靴で登っていた。凄まじい…。その後は九十九折りの道を詰めていった。

東沢乗越からは陰鬱な樹林と、花崗岩の奇岩帯を繰り返して餓鬼を目指す、どこかおどろおどろしいものを感じる。一昨年の冬合宿の舞台であったというが、いったいどこを通ったのだと思うほどやばそうだった。特に剣ズリの当たりは、夏でも心臓に良くない。剣ズリ付近の稜線で風雨は更に強くなる一方。新人合宿を彷彿させる降りっぷりだ。餓鬼はさっさと通過して、樹林帯を目指す。幸い風の当たらない所を発見したので、そこでビバーク準備をする(テントはあえて持ってきてない)。今日ほど冷え切った体に、暖かい飲み物は有難い、と思ったことはなかった。

7/18 3:30 起床～4:45 出発～7:50 東沢乗越～10:15 燕岳～13:40 中房温泉～19:20BOX 着

昨日からの雨は一晩中降り続き、おかげで冬合宿よりも寒い一夜だった。しかし、動き始めると何とか体が温まってくる。天気は相変わらずの風雨で、この中で稜線を歩くのはまずかろうと判断し、唐沢岳はカットする。またの機会に来ればいいことだ(勿論自転車で)。

昨日通った道を引き返すが、強風の中時折晴れ間が覗かせる。こんな時が一番悔しい。しかし、それも束の間のこと、すぐにもとの風雨に戻ってしまう。東沢乗越から北燕を目指し、樹林の尾根を登り返す。このあたりからは人が大分増えてきた。北燕周辺も冬は一体どうやって行ったのかと思ってしまう。片寄さんはよくルーファイをやったもんだ。

燕の山頂では珍しく記念撮影をする。また、去年の冬合宿で天上沢に消えたはたけのザックを探してみた。ここから先は、登山者がうじゃうじゃいるので最早お仕事。三連休というだけあって、合戦尾根からは人が蟻のように上がってくる。中房温泉まで一気に下って、有明荘で待望の温泉につかる。昨日のビバークの寒さが嘘みたいだ。

その後はお楽しみの下り。やはり自転車山行の醍醐味は、この一瞬に凝縮している気がする。ついでにスタ郎に寄って帰松。皆さんお疲れ様でした。

一番の理由は車が無いからなのですが、定番(!?)となってきた自転車山行。そろそろネタが尽きてきそうですが、まだまだ止めるつもりはありません。

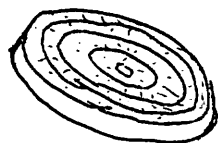
あと、日本百名山を自転車でアプローチして登った人がいるそうですが、別にバクった訳でも張り合ってもいません。車が無くても自転車で日本アルプスを登ることができる。これが信大の良い所があります。そんな訳で今後も交通安全に気をつけて続けていくつもりなので、皆様今後もお付き合い下さい。

最後になりますが、お忙しい中留守を引き受けて下さった OB の豊田浩太郎さん、ありがとうございました。

記 高橋昭彦

Hiho.T

スタローにて...

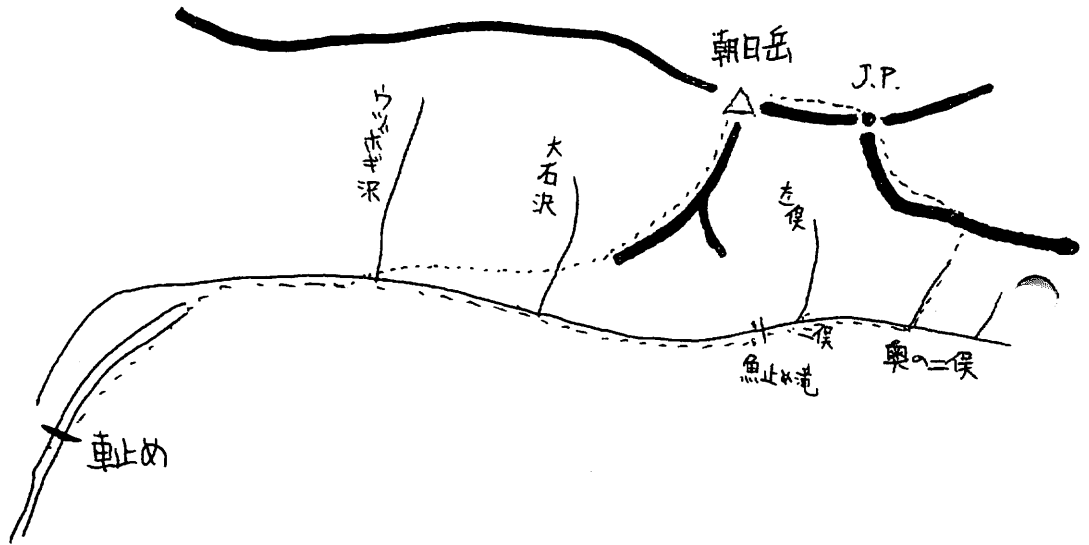


うまく描けませんごめんなさい。(泣)

宝川・ナルミズ沢

7/10 (土) の日

● 概念図



● メンバー

三森 武志 (会3 理2) , 高谷英太郎 (会3 経4)
片岡 陽介 (会1 理1) , 山中 豪 (会1 農1)

● コースタイム

松本 = 7:50 車止め発 ~ 11:00 大石沢 出合 ~

11:50 魚止の滝 ~ 12:45 二俣 ~ 14:20 稜線 ~ 14:55

J.P. ~ 19:00 車止め = 松本

● 概要

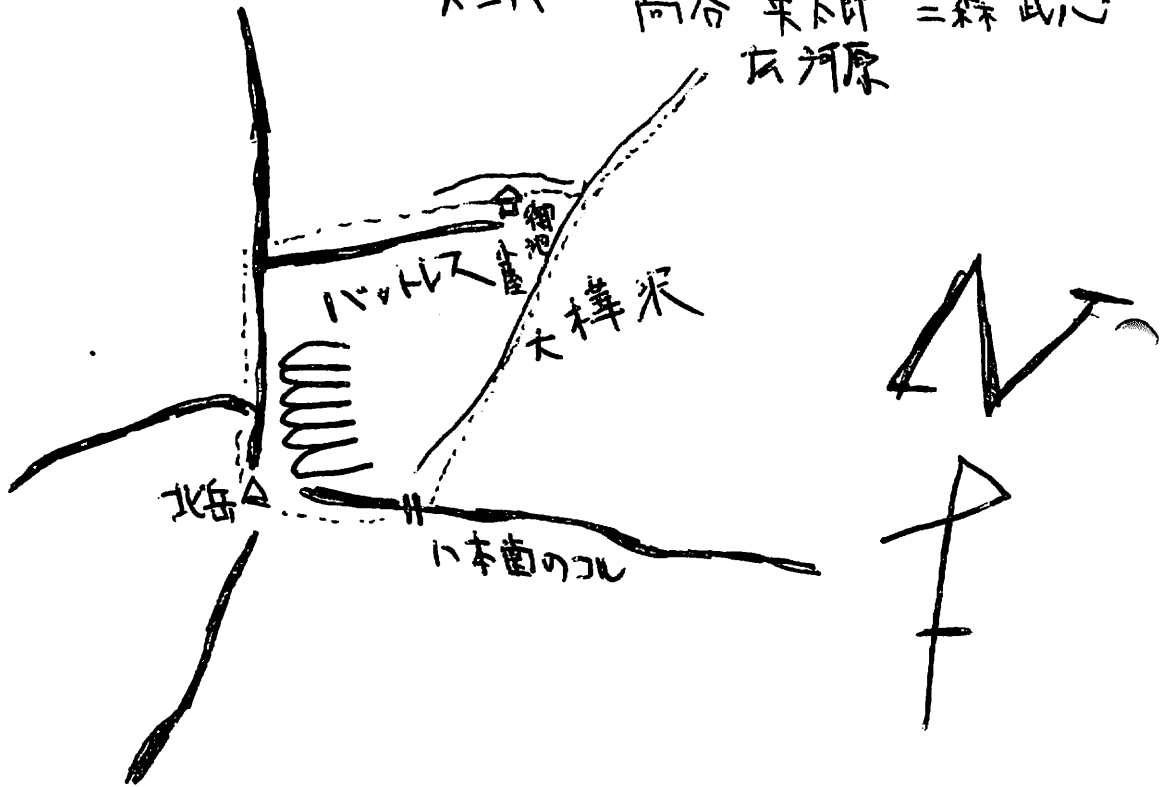
前夜、12時ごろに車で松本を出発。都合6時間かけて車止めまで行く。暗いせいでかなり迷った。

次の日、天気が悪くなるという予報だったので、ギリギリで日帰りになるかと思いつきながら出発。林道から登山道を歩き、2時間ほどで「ナルミズ」沢に出る。さらに歩いて「ウツボギ」沢との出合いで「はきかえて」入渓する。そこからしばらくは大きな淵とナメ滝の連続。晴れてはいなかったが、いい感じの広く明るい溪相で、大きな淵を見つけるたびに、ウォーター 슬라이ダから飛びこみやらやってしまった。魚がやたら泳いでいるのを横目に見ながら、特に苦もなく沢を「ツメて」いった。奥の二俣から稜線へとツメる部分が一番悪く、細くて急で「恐かった」。途中からササヤブをこいで稜線へと上がる。このころには雨も大分強く降るようになり、みんな雨具を着てあやしい登山道を進んだ。雨がやむ心配はなく、下までおりにすることになる。もとの「ウツボギ」沢出合いまで戻ると、あらまあ、朝は清流だった「ナルミズ」沢が「濁った激流」になっていた。たった半日でここまでかゆるとは……恐るべし。結局雨は始終降りつづけ、泊まることなく一気に下山となった。その後6時間かけての～んびり松本に帰った。日帰り+12時間の運転、ニーヤさんご苦労サマ!!

北岳バットレス

期間 7/17 ~ 7/19

メンバー 高谷 菜太郎 三森 武志
広河原



7/17 15:10 広河原◎ ~ 16:40 二保◎ ~ 17:10 御池小屋◎

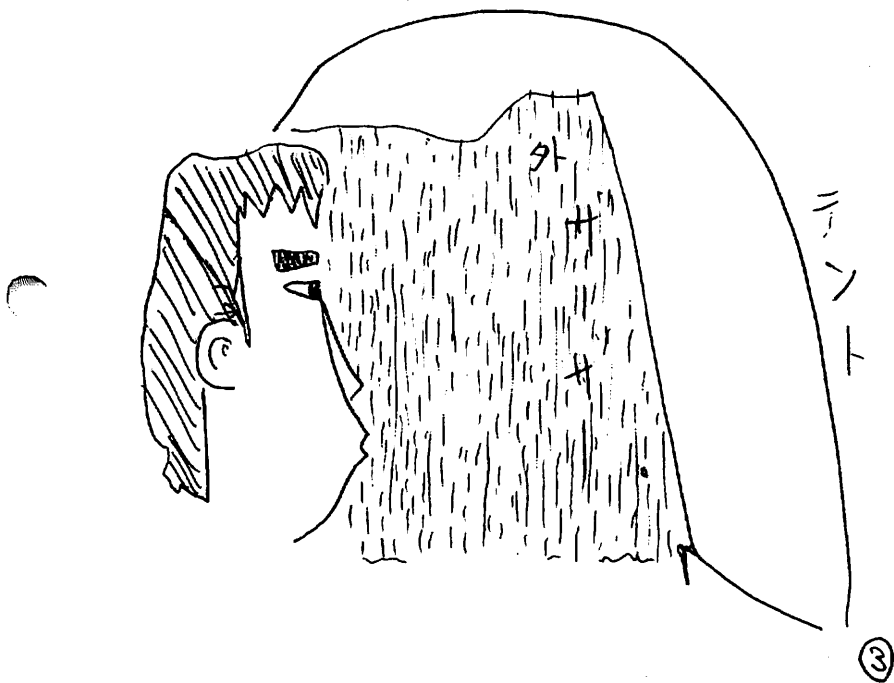
松本を昼頃出発して、南アルプス林道が一般者通行止のため奈良田を經由して、広河原へ。通い慣れた道だ。今にも触りたしそうな空もようの中、今回は大樺沢ルートから御池小屋へ。開放的で、傾斜も緩くア700-4としてはこちらがおすすめ。程なくして御池小屋へ。

7/18 5:00 起床 ● ~ 沈殿

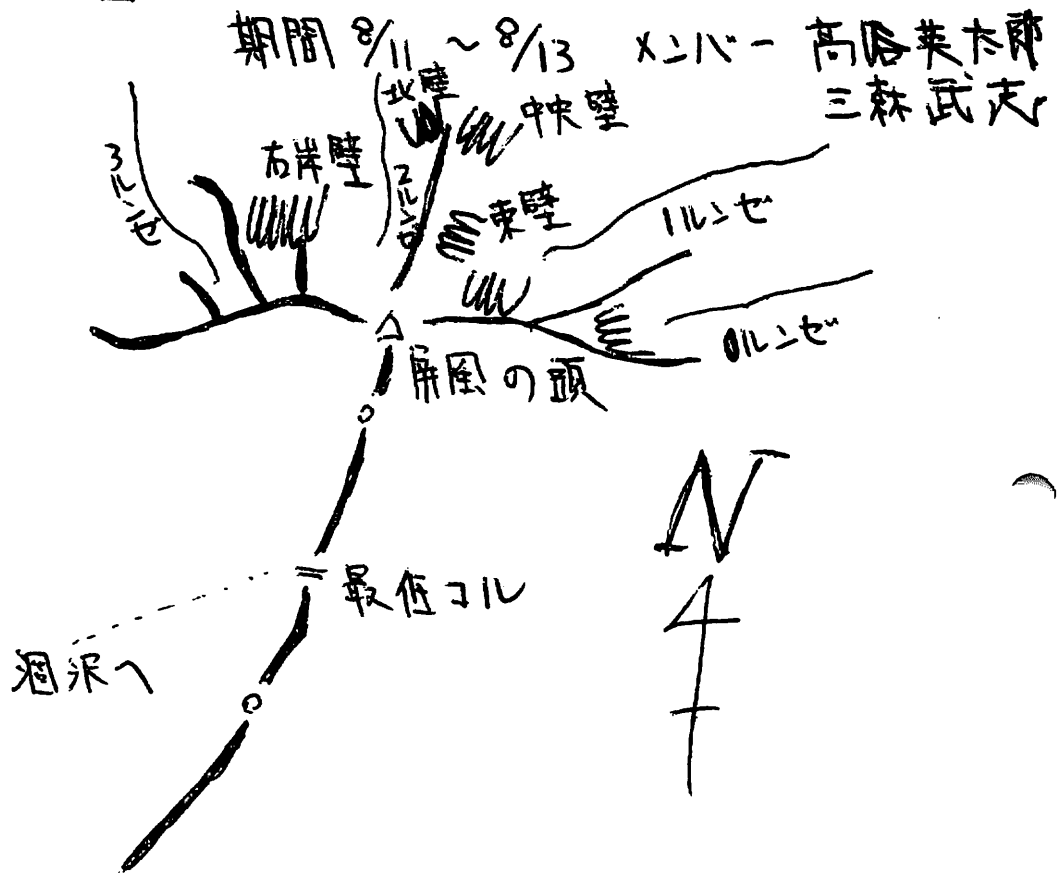
夜の内から強い雨が降り続き、起きても雨。早くも沈殿と決め込み、3.7寝。

7/19 3:00 起床◎ ~ 3:50 発◎ ~ 5:10 Dカリー-木滝 ~ 6:40
下部7ランゲ取付 ● ~ 8:40 上部7ランゲ取付◎ ~ 終了点◎
12:00 北岳◎ 13:20 御池小屋◎ ~ 15:30 広河原◎ 10:50

この日もスッキリとしない天気だ、たか登らずに帰るのは
ゴリである、たので取付まではいってみることに。途中から小
雨が降りだすが、無理そうだと、たら退却することとして
登ることとする。今日も、Dがリー木滝を下部岩壁での
登路とした。下部フランクの取付は、少々迷、たか発見
し取付く。陸はヒツ、濡れの状態だ。それでも順
調にロープを延ばし、上部フランクへ。マッシュ箱の懸
垂点で四尾根を登る人達と合流。上部にいくに
つれ岩が乾いてきて快適に登る。程なくして終了
点へ。頂上、草すべり経由で小屋へと戻り、荷物をま
とめ、またまた降りだしそうな空模様の下広河原へ。
岩が乾いていたらさぞかし快適だったろうに.....。



屏風岩東壁



18:00
8/11 サマ天祭 ~ 20:00 横尾B.C

暗くなる前に出発したが、途中から満点(天)の星空に。
流れ星をみながらのアプロ-4。オツですなあ。夜寝。
時も満天の星の下、~~寝~~で寝た。セ-97。

8/12 4:35 起床 ~ 6:05 T4取付 ~ 7:20 東壁取付 ~ 14:20
終了点 ~ 15:30 T2 ~ 16:05 1ルンセ ~ 17:30 1-入

いよいよ初ヒョ-ブである。上々の天気の下、思、たより
も簡単なT4尾根をこなし。東壁取付。前のパーティ-
と程よく間隔を開けてスタート。アプロミのかけかえ。で
も景色は素晴らしい。前のパーティ-は継続するらし
く重い荷物を背負、アヒ-コラ頑張、ている。それにして
~15~

遅いハッキリ言、て待ち疲れ。終了点に付いたのは取
付いてから7時間後。その後、イソイソと懸垂。アア
疲れた。

8/13 3:30 起床 ~ 5:00 T4取付 ~ 6:50 豊稜取付 ~ 21:10
終了点 ~ 15:00 涸沢ヒュウテ ~ 17:00 テニ場 ~ 20:20 サマ天
この日もせ、せとT4展根をこなし。取付入。前2パーティ
ー。昨日の悪夢が。しかし、今日の前のパーティーは
早く待つことはほとんどなかった。豊稜は、東稜よ
りもフリー部分が多く快適。核心2ヒュークのア
ミのかけかえは、リングのない相引ものがかた
ホルトを使用するもので非常に怖い。でも眺め
は素晴らしい。これだよ、これ。快適にこなし。
尾根に抜けた。尾根にはハッキリとした登山
道がついていて全く問題なし。涸沢経由でB
Cへ。荷物をまとめサマ天へ。
夢にまで見た展風トハン。楽しかったなあ。でも夏
はちょっと暑すぎるかな.....。



立山も剣も、今は遙か遠く

僕らはあの頂を越え、今大いなる谷の始まりにいる

そして、ここから北に連なる峰々を越えてゆき

海へ行くのだ

Project Summertime Traveler 第2弾

北アルプス

J 走

L 高橋昭彦 (会2 農2)

片岡陽介 (会1 理1)

佐山鉄平 (会1 理3)

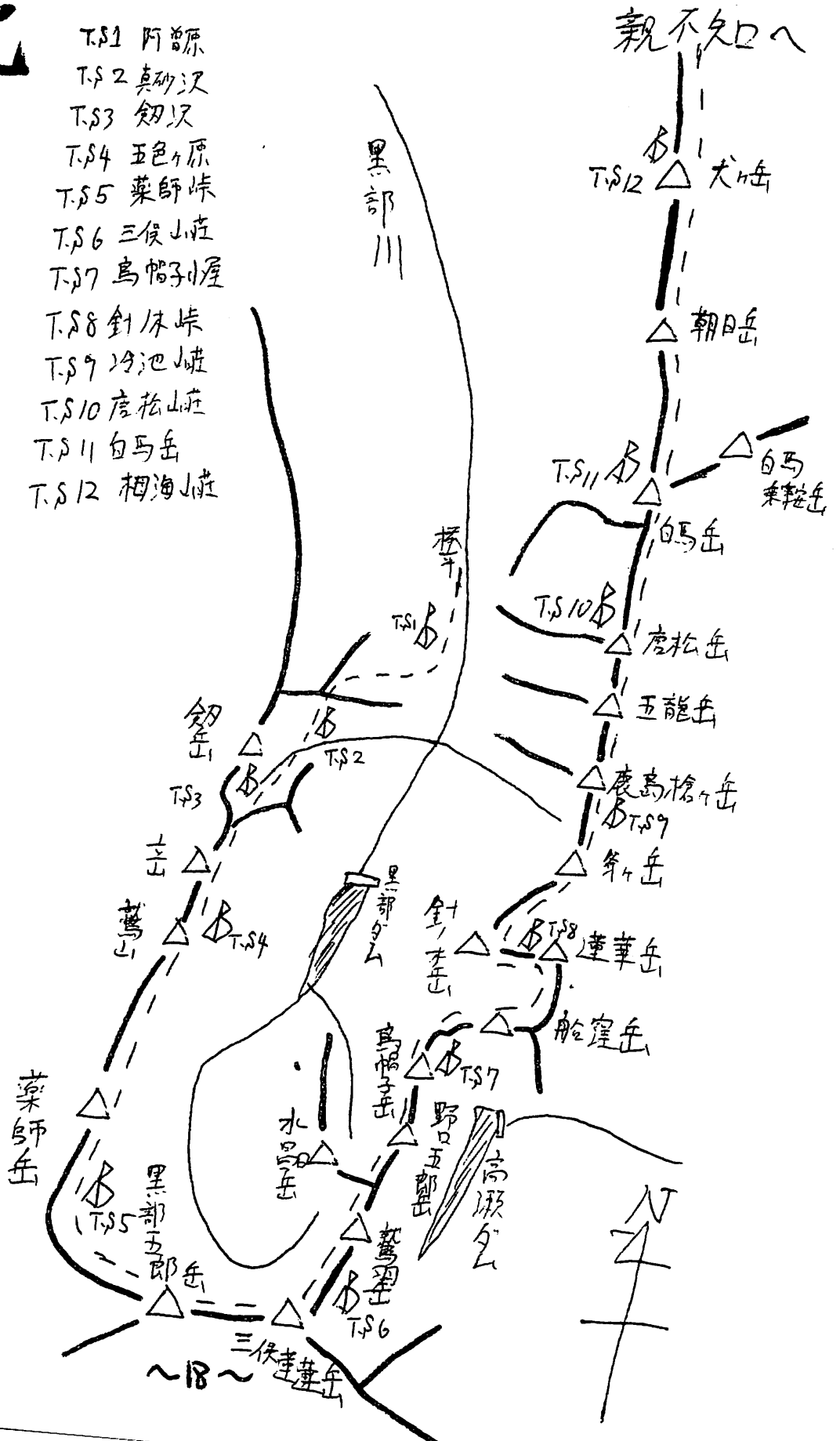
山中豪 (会1 農1)

記 高橋旅人

北アルプス丁走

8/4
5
1/17

- T.S1 阿曾原
- T.S2 真砂沢
- T.S3 剣沢
- T.S4 五色ヶ原
- T.S5 薬師峠
- T.S6 三俣山荘
- T.S7 烏帽子小屋
- T.S8 針ヶ原
- T.S9 冷池峠
- T.S10 唐松山荘
- T.S11 白馬岳
- T.S12 梅海山荘



8月4日 悪夢のスタート

旅立ちの時、人は何を思うのだろうか。未知なる旅路に夢を膨らませる。あるいは今までの生活を省みる。不安に潰されそうになるということもあるだろう。しかし、そんな感傷的な予想に反して、旅立ちはいつの日もあわただしく、そんな暇はない。

ご多分に漏れず僕らの旅立ちもバタバタしたものだった。昨日のうちにペミカン作りは済ませ、今日はそれ以外の準備。そして夕方にはBOXを出発。松本駅までは歩いていった。

さて、例によって最大のネックは差し入れのスイカ。担ぐのも下ろすのにも難儀し、大糸線の車内ではガラスを割ってしまった。これ以上持ち歩くのは危険なので魚津で食べることにする。ところが怪しまれて警察まで来る始末。差し入れをくれるのはありがたいが、士気を落とすようなものや不要なものは持っていない勇気も必要と感じた。

(17:30 BOX 発～23:50 魚津)

8月5日 大いなる谷

朝一の地鉄とトロッコ列車を乗り継ぎ樺平へ。いよいよ気狂いな旅路の始まりだ。昨晚（厳密にいうと今日未明）のスイカのおかげでかなりげんなりさせられていたが、地鉄やトロッコ列車の風情のおかげでだんだんやる気が復活してきた。

樺平から少し登って水平道に入る。早くも片岡ばてる。聞けば重たいカメラを持参したとか。やれやれ。僕はというと荷物の重さは植生を観察することで紛らわせた（腐っても森林なので）。それにしても良くこんな所に道を作ったものだ、と先人の苦勞に感服せずにはいられない。志合谷のトンネルでは涼しいこともあり皆大興奮。曇ってはいたが、とにかくこの日は暑かった。

阿曾原では最初で最後の温泉に入る。大自然の中、狭い空が赤く染まるのを眺めながら、男四匹すっ裸で風呂に浸かった。

(6:30 魚津発～ 8:50 樺平 9:15 発～15:50 阿曾原)

8月6日 空を目指して

昨夜は雨が降ったようだが、運良く朝までには上がったようだ。曇りのスタ

ート、まずは阿曾原峠を目指す。ここで気分屋の佐山が早速ブチ切れそうになる（本人談）。仙人湯まで雪渓を二回トラバース。雪の状態は悪いようだ。仙人湯小屋に辿り着くと、小屋のおじさんが全裸で洗濯中。行き先を告げたら大笑いされた。まあ、それが僕らにとって最大級の賛辞だ。また、年季の入ったピッケルを持ったご夫婦に会う。何でも退職を機に山を再開したそうだ。彼らのように爽やかな笑顔で、いつもでも山に登ればと思う。

仙人谷の雪渓はズタボロ。ここだけは僕が先頭に立つ。が、岩についていたマークに誘われ雪渓を割ってしまう。あぶないあぶない。結局右岸に巻き道があり、そこを進んだ。

仙人池ではいつぞやのTVに出ていたおばあちゃんにあった。本当に優しい方だった。ガスっていたが、何度かガスが取れ水面に移る剣を見ることができた。

ここから剣沢への下りは、あまりの暑さにのぼせて鼻血が出る。夏の1000m台は危険です。絶対。真砂沢へは去年使えた雪渓が割れており、ハジゴ谷側に橋を渡ってから雪渓を再び渡って左岸に移った。真砂沢のテン場には剣で定着をやっている大学が沢山いた。ここでREDを減らすべく各大学に振舞ってみた。あの酒にこんな友好的、かつ平和的な利用法があるとは思ってもみなかった。

(3:30 起床 4:50 発～9:05 仙人湯～11:50 仙人池～16:50 真砂沢ロッヂ)

8月7日 岩と雪

昨年通った雪渓がズタボロだったので、この先どうなることやらと心配しながら出発。長治郎は一箇所切れており、上部にもクレバスが開いているようだ。剣沢雪渓に至っては、7月の豪雨の影響で泥の道と化していた。それにしても雪渓は涼しい。自然のクーラーは偉大だ。また、平坦な所で走ってみるが荷物の重さ（そんなに重いわけではないけど）にすぐ力尽きた。

剣沢にテントを張り、山頂をピストン。途中で日本海から太平洋へぬける鉄人レースの参加者に出くわした。山頂は残念ながらガスの中だったが、夕方にはテン場から剣の雄姿を望むことができた。

(4:00 起床 5:25 発～8:30 剣沢 BC9:10 発～12:10 剣岳～15:00BC)

8月8日 蒼穹闊歩

この日は朝から抜けるような青空。北アな山並は勿論のこと、富山平野や海

まで望むことができた。こんな風景を見せたかったし、見たかったのだ。流石に一ノ越の人の多さには閉口したが。

鬼岳に雪溪のトラバースがあると聞いていたが、そんなものはまったく無し。やはりどこも雪は少ないようだ。

昼過ぎには五色に到着。このあたりはお花畑が多く癒される。ガスりはしたが結局夕立もなく、ここまで4日間降られず。晴れ男佐山、恐るべし。

(3:00 起床 4:25 発～7:45 雄山～12:00 五色が原)

8月9日 五里霧中

この日は初の12時間行動なので、ヘッドラを点けて出発。ガスっていたため、鳶山の手前で少々迷う。一旦下って越中沢岳へ。この辺りは広大な庭園が広がっており、霧を纏って幻想的な雰囲気漂わせていた。下りでは雷鳥を発見し、暫し皆で癒される。その後もキツイアップダウンを繰り返しスゴ乗越小屋へ。ここから来た方向を振り返ると、絶望的な気分になれる。

薬師へはひたすら登る。しかし、稜線は涼しく気持ちいいので、快調に飛ばす。それにしても北薬師から薬師までがやたら長かった。ここで佐山腹痛に襲われる。

薬師峠までは一気に下るのだが、下に着いてびっくり。夥しい数の早大某サークルのテントがあり、他の部分もテントで埋め尽くされていた。なんとかテントを張ることができたが、本当にテン場の確保が核心になりそう。また、他の大学を見ると花が欲しくなる…。汗臭い山男は所詮滅びる運命なのだろうか(涙)。

また、この日は夕立があったが水汲みに行った僕だけが被害に遭っただけ。一体いつまでこの好天が続くのか。晴れるのは喜ばしいことだが、逆にいつ降られるんじゃないかと怯えるようになってきた。

(2:00 起床 3:15 発～8:40 スゴ乗越小屋～12:40 薬師岳～14:30 薬師峠)

8月10日 朝影

この日も長時間動くので、ヘッドラ行動で出発。薄霧漂う中、平坦な草原が広がる太郎山を越えてゆく。歩きながら小屋泊まりのおばちゃんと話す(僕の地元の山に行ったことがあるとのこと)。

明るくなるにつれてガスが取れ、北ノ俣岳の手前で雲間から漸く太陽が顔を

出す。その瞬間、広大なハイマツの草原に付いた朝露は、虹色に輝きを放ち、陽光は僕らを優しく包んでくれた。山を撫でる涼風は、草原を囁かせ、よりいっそう陽光を乱反射させた。そして、絶えず流れ行くこの風景の中で、僕らは生きている。きっとここではそんな風景が、日々姿を変えながら、悠久の遙か昔より描かれ続けているのだろう。生涯山登りを続けたいと思うのは、こんな時なのだと感じた。

山には偶然出会う風景と、長い間あこがれた風景の二つがある。前者は本当に思いがけないもので感動はとりわけ大きい。後者はあこがれた年月の分それを噛み締めることができ、感慨おかいものだ。今日のコースは山を始めて間もないころからあこがれ続けていたもので、それに思いがけない朝の一コマが融合し、より感慨深いものになった。

雷鳥を眺めながら黒部五郎岳へ。山頂に着く頃にはガスってきたが、カールの中だけは見下ろすことができた。小屋へは少し歩きにくいのが、稜線のコースを下る。左手のカールを見下ろしながら歩くので非常に気持ち良い。

小屋で一本を取って本日の核心、三俣への登山にかかると。樹林の中は暑く陰鬱な気分になるが、だるさは「雲に嘯く」を歌って吹き飛ばす。山頂は見えなくガスの中。下方には小屋や硫黄尾根の下部が辛うじて見えるが、槍は見えない。今ここが本縦走最南端のピークだ。気持ちを再び入れなおすことにしよう。

小屋に伊藤さんはいらっしゃらないようだが、無事お酒は届けられた。良かった良かった。しかし、REDを減らすべく料理酒として使っていたが、入れすぎてREDのシチュー割りになってしまった。皆撃沈する。また、松ワンにもREDを進呈したところ、菓子やら漫画（ドラエモ…以下略）を持ってきてくれた。下界では忌み嫌われているREDだが、なぜかこの縦走では役に立っていた（重いけど）。

(2:30 起床 3:50 発～8:55 黒部五郎岳～13:00 三俣蓮華岳～13:40 三俣山荘)

8月11日 雲に嘯く

この日は朝から快晴。下界は雲海に覆い尽くされており、空に陰りなぞ一つもない。ただ周囲の山々が、天と地の境を鋭く分けているだけだ。

槍を横目に鷲羽岳のジクザグ道を登っていく。朝一の一本目はいつも疲れるが、槍の雄姿を仰ぐと不思議と力が湧いてくるような気がする。山頂からは、槍、穂高はもちろんのこと、僕らが越えてきた立山や剣。そして、これから出合いに行く後立や白馬も見渡せた。ただの縦走者にとってこの景観は、ただの

雄大、壮麗、悠久…な北アルプスだ。形容する言葉はいくらでもある。しかし、僕らにとって空に躍る数々の頂は、その全てが海へ至る道なのだ。こんな見方をしたら、同じ頂からの風景も一味違ったものになるのではないだろうか。

水晶小屋まで進み山頂を往復する。ここで、みなトレジャーハンターと化す。国立公園内のものを持ち帰ってははいけません。その先も快適な稜線散歩で烏帽子小屋に至った。晴れの裏銀は一步一步進むごとに槍が遠ざかる、あるいは近付く。これに浪漫を感じるのは僕だけではない筈だ。ちなみに三ッ岳の辺りで実に無礼なおっさんがいて、大人気無い所を見せてしまった。反省。だが、礼をわきまえないやつに返す儀は、義理人情に堅い群馬人の僕でも持っていない(関係ない?)。

小屋でテントを張って烏帽子の山頂を往復。僕は三度目になるが、いつ来てもここには違った風景が広がっている。ガストン・レビューファの言葉を思い出した。

因みにここから先水は不自由する。どうにか出費を減らそうと昨年は行けなかった地糖へ行く道ができていたので、その水を煮沸してみる(白ガスが大量に余っていたので)。さすがにミジンコやらなんやらが汲んだ直後のポリタンの中で生態系(?)を作っていたので、皆引いていた。教訓、貧乏人は命懸け。でもケチりすぎてはいけない。

(3:00 起床 4:40 発~5:40 鷲羽岳~7:05 水晶小屋~7:40 水晶岳~13:05 烏帽子小屋~13:50 烏帽子岳~14:40 烏帽子小屋)

8月12日 登降者達

いよいよ本縦走の体力的核心である。南沢岳から始まる樹林の中の急登と急降下の連続。ニセピークの連続する北葛岳への登り。そしてとどめは蓮華岳への絶望的な登り返し。船窪で切っ飛ばせばたいしたことはないが、烏帽子~針ノ木にかけては北アルプスでもとびきり辛い区間であろう。二日に分けてしまえばのんびり行くことができる。しかし、ここを一日で抜けられなければ、この縦走は途端に色褪せてしまうだろう。

幸い天気は昨日と同様快晴。しかも、持ってくれそうな空だ。烏帽子の麓の庭園を抜け南沢岳に登る。彼方に聳えていた立山も大分近づいてきた。立山から薬師まで、往路を一望できるが、改めて山の大きさに驚かされる。同時にそこを歩いてきた自分たちにも。

いよいよ、核心へ突入。不動沢は去年よりも更に崩壊している。北アで真っ先に無くなるのはここだろう。船窪のテン場までは暑そうだったが皆元気だ。

しかし、ここからが気合の入れ所だ。

七倉岳を越えて七倉乗越で一本。ここで残骸レーションを食べていたら、それを見かねたおじさんおばさんパーティーからキュウリとベーコンをいただいた。北葛と蓮華の山頂で食べたが、涙が出るくらいうまかった。山で他人の力を借りるのは本来登山者として失格だ。しかし、長期で尚且つ普通の縦走では、こうした一期一会の交流も貴重なものだ。所詮僕らが歩いている登山道は、先人によって作られてきたものなのだし。

北葛の登りはニセピークが多く、こんな時に強さの違いが出てくる。豪なんか本当に心で登っていた（ガッシャに「心で登る」と書いてある）。最後の蓮華の大登り（笑）では歌ったりして気合を入れた。

皆へろへろになりながらも何とか山頂に到着。この頃には背後から力を与え続けてくれた槍も、ガスで見えなくなってしまった。峠までの下りも気合で乗り切り長い一日を終えた。

(4:00 起床 5:35 発～12:40 船窪T S～17:40 蓮華岳～18:40 針ノ木峠)

8月13日 行く夏

さすがに昨日は到着が遅かったので遅めに出発。天気はまたしても快晴。これで九日間降られていない。奇跡としか言いようがない天気だ。

針ノ木の山頂では、僕ら以外は皆おじいさんおばあさん。「これからの日本は頼むよ！」と言われてしまった。信大のばか学科トップ2（地質・佐山、森林・高橋と豪）+αのお馬鹿（片岡）を捕まえて何言ってんのだか。それにしても今日本で一番山を楽しんでいるのは彼ら、高齢者の登山者ではないかと思う。若い人は圧倒的に少ないし（会ったのは剣と薬師と三俣周辺）、高齢者の目の方が輝いている気がする。

左手に今まで歩いてきた山を見ながら今日のはのんびりと歩く。これぞJ走の醍醐味！。振り返れば槍、そして、先には日本海。特に1Pごとに近づく海に心は躍らずにいられない。しかしながら、この平穏な青空に秋の訪れを感じた。植物ももう秋のものが始まっているとのこと。銀色に光る入道雲のない空に幾ばくかの寂寥を感じた。

佐山の心の山、爺ヶ岳を登り冷池へ。暑さで皆フラフラだった。ここで山歩会のパーティーに会ったが、どこも山屋人口の減少に悩むのは同じらしい。そして、誰が見ても冷池のバイトの娘はかわいいようだ。

(5:00 起床 6:15 発～7:00 針ノ木岳～13:20 種池山荘～15:45 冷池山荘)

8月14日 暗雲

そろそろ年貢の納め時か、この日は朝から風が強く不気味な雲が次第に空を覆ってきた。鹿島槍の南峰はさっさと通過。北峰は一応往復する。だんだんと雲の切れ端が飛び始めてきた。下界はあんなに晴れているのに…。

キレットはどちらかと言うと落石が怖い。折角なのでメットを装着する。そうでなければボナッティではないが、ピッケルもろともほおり投げたい気分だ。

キレット小屋を過ぎた辺りでついに雨が降ってきた。五竜はそんなに僕が嫌いらしい。気分は去年のプレ冬だ。何も感動のない山頂で万歳三唱をしてさっさと下る。予定では五竜山荘までだったが、まだ時間があつたので唐松を目指すことにする。

唐松までは色々なパーティーに会った。おじいさんおばあさんや若者（小屋泊まりみたいだが、おいおい）、中にはあからさまに貧弱な装備で風雨の稜線を歩くパーティーもいた。これもロープウェイの功罪だろうか。

山荘に到着してテントを張るが。ここで豪の足の指が腫れているのを発見する。靴擦れで皮がむけた部分からばい菌が入って炎症を起こしているようだ。山荘の方に応急処置をしていただき、一時はいったん山から下ろして医者に程度を見てもらうことになる。そこで下界の担当医を当たってもらったところ、なんと OB の新谷先生が。症状と処置を話してもらったところ「大丈夫だ、行け!!」との心強い (!?) お言葉をいただく。ひとまず白馬までは様子を見て、悪化したら即下山ということで続行することにした。

(3:00 起床 4:40 発～6:00 鹿島槍南峰～7:35 キレット小屋～11:15 五竜岳～12:10 五竜山荘～14:40 唐松山荘)

8月15日 光明

昨晚からの雨は朝になっても止まず、ひとまず待機する。さすがに濡れている不帰に突っ込む気になれない。

九時ごろから晴れてきたので撤収して出発。幸い岩もすぐ乾き、昨日より怖くない。天狗の大登りを一気に登って頭まで行く。この頃には晴れとは行かないが、ガスは取れ展望は良くなる一方。槍はほとんど見えなくなってきているがまだ、それとなく判別できる。

その先も風はあるが快適な稜線散歩。まさかここまで良くなるとは思わなかった。しかし、白馬の高山植物は完全に終わりを迎えたようだ。道端のしおれた植物がかつての栄華を物語っているようだ。

テン場はやたら風が強く、一年は皆戸惑っているようだ。冬はこんなものじゃないから更に肝を抜かずであろう。豪の足は処置が良かったのか快方に向かっているようだ。よって、予定通りこのまま日本海に突入することにした。

(4:30 起床 10:30 発～12:55 天狗の頭～16:25 白馬頂上山荘)

8月16日 海へ至る道

一つ山旅は、その山名が、ルートが旅人の頭に浮かんだ時から始まる。そして、下界で準備を、あるいは他の山で力をつける。そうした全ての行為が、あこがれの山を目指す旅の一環なのだ。

僕もいつの頃からか、雪と岩を纏う頂から、荒波打ち寄せる海へ下る梅海新道にあこがれるようになってきた。そして、今僕はここに立っている。いろいろ遠回りをし、幾つもの頂を越えて。さよなら槍よ、そして、また逢おう。僕は、ずっと昔、槍に出会う前から追いつづけたあこがれに会いに行く。

吹き荒ぶ風の中、まずは白馬の山頂を目指す。さすがは北ア随一の人気スポット。人ごみを掻き分けて進んでいる気分だ。寒いので山頂で記念撮影をして、さっさと下りにかかる。この先にここより高い場所はない。皆下山パワー全開。目指すは梅海山荘だ。

それにしても、遮蔽物が無いだけに風がやたらと強い。雪倉岳を下るまでは皆凍えていた。逆に風が止むなり夏の日差しに照らされ汗だくになる。赤男山は山腹をトラバース。ここに広がる湿原は、岩に慣れた僕らを癒してくれる。朝日への登り返しは樹林の中ということもあって、数日振りに顔中汗まみれになる。しかし、山頂にはそれを吹き飛ばしてくれる涼風と、更に力を注いでくれる風景が広がっていた。

なだらかな山頂には花や木々が点在し、稜線は緩い弧を描き海と地を分けている。川の始まりから一步一步歩いてきて、もうそこに手が届く所まで来ている。そんな感覚にも僕はあこがれてきたのだ。

ここを下って遂に梅海新道に突入する。今となっては本当にうろ覚え程度だが、いつぞやの山溪に掲載されていた、この開拓記事を読んだときの感動、そして、僕もいつの日かそこを歩きたいと心に決めたことだけは覚えている。開拓者の情熱に比べればちっぽけなものかもしれないが、アルプスと海を繋げる、という意志は少なからずわかる。そして今、意志ある道を更に意志あるラインの一部にすべく、僕らは歩くのだ。

梅の森を抜け、アヤメ平、黒岩平の湿地帯に至るが、驚くと同時に感心もした。ただこの道が海へ至るだけでなく、こんな別天地を通るとは。ここは正し

く桃源というべきだろう。空はガスリ始めてしまい、どこか陰鬱な雰囲気漂うが、もし快晴の下でここにすれば緑の絨毯と蒼穹と碧海（見えるのならば）がどこまでも広がっているのだろう。ただ踏み跡から始まる侵食が激しく、いつかは失われてしまうのではないかと心配だ。

黒岩山を過ぎてしまうと、感動もそれまで。本当に海へ行くためだけの道であった。少なくともここは夏に来る所じゃない。（今までよりかは）小さなアップダウンを何度かこなし、北叉の水場に到着。ここには7人パーティーのおじさん達に会う。白馬から日本海へ行くそうだが、それだけでおばかと言われたそう。白馬で馬鹿なら、僕らに当てはまる言葉は果たして存在するのだろうか。

水を汲み偽ピークに騙されながらも、犬ヶ岳を越えてようやく梅海山荘に到着。山荘には何人かいるようなので、ヘリポートに幕営。それにしても、酔狂な人はどこにもいるものだ。

(4:00 起床 5:30 出発~6:00 白馬岳~11:00 朝日岳~17:10 梅海山荘)

8月17日 山の終わる場所

昨日は夕焼け、とまではいかないが紫雲を見ることはできた。やはり最後は晴れの海を見たい。しかし、思い出はいつの日も雨だ。

犬ヶ岳を後にしていくつかのピークを越えて白鳥山の登りにかかる。ここが本当に最後の大きな登りだ。この辺りからバケツをひっくり返したような、土砂降りの雨になる。まるで13日分の雨が一気に降っているかのようだ。しかし、暑いのと面倒なのと最終日ということで誰一人として合羽を着ようとしなない。まあ12日間汗にまみれてきたヤロー共には最高のシャワーだ。それにしてもブナの森には癒される。あの青白い樹皮は下山を急ぐ心を静めてくれる。

その後も雨は土砂降ったり止んだり。郷里の山を彷彿させる里山的な道を歩き、尻高山や入道山を越えていく。もう最後の下りだ。といっても眼前に海が広がっているというわけではなく、ただ下界の音がだんだんと大きくなっていくことから感じているだけなのだが。それでも、木々の間に輝く青い部分は、空ではなく海なのだろう。

夏を旅すること。それは誰もが一度は経験する、若しくは今している熱き血潮の奔流なのだ。馬鹿でなければできない、馬鹿にしかわからない、意志あるラインを描く旅。そんなJ走ももうすぐ終わる。

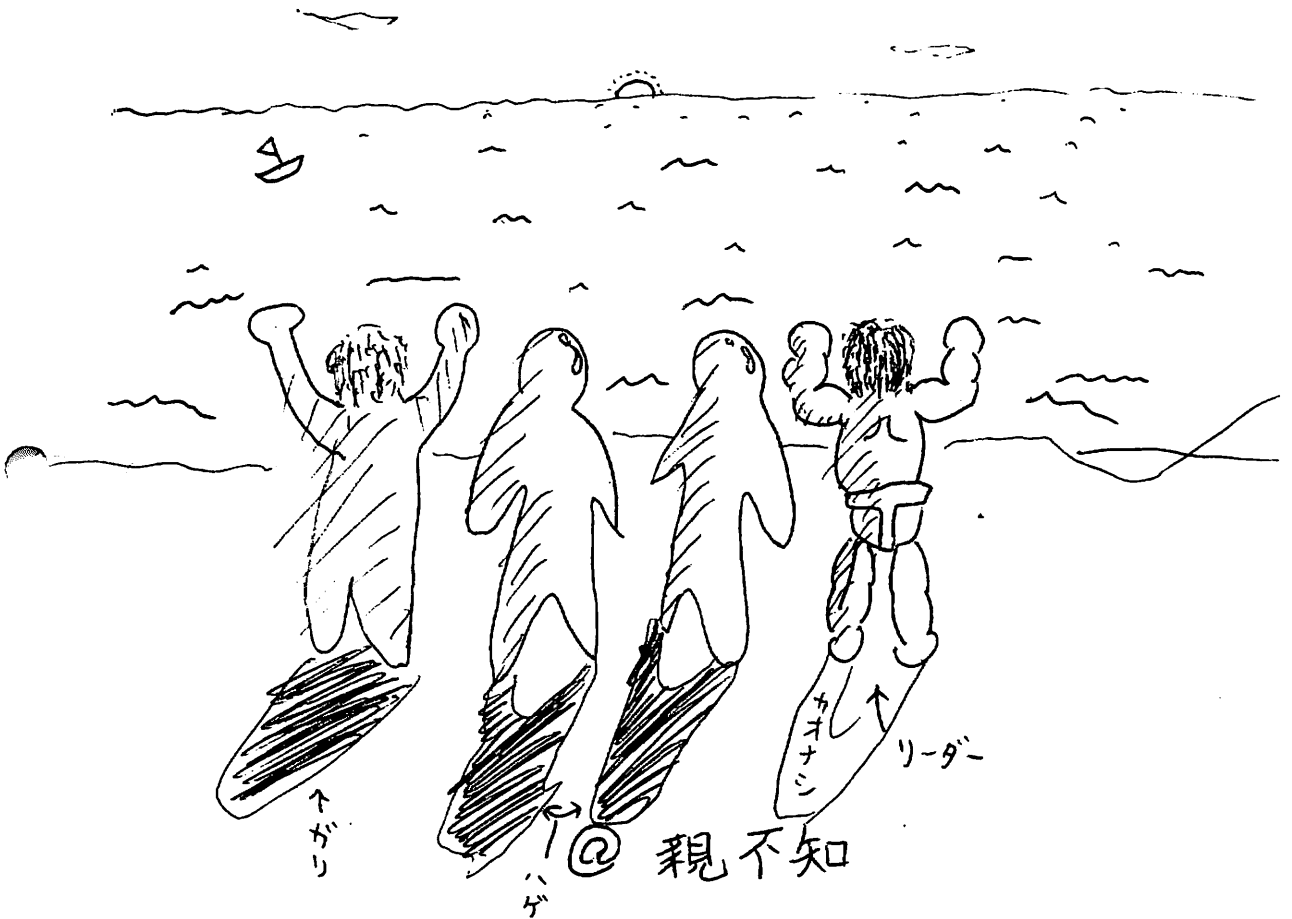
車が見えてきた。そして、コンクリートの塀におち当たる。坂を下り終え梅海新道の門をくぐった。三年前、自転車でここを訪れたときもこんな鈍色の空

だった。しかし、前よりも黒ずんだ門に、あこがれ続けた月日を感じた。

ひとまずザックをここに置いて海岸に下りる。そして、降りしきる雨の中、波音をBGMに「雲に嘯く」と「春寂寥」を轟かせる。その後は待望の海水浴。皆服のまま突っ込んで、荒波に洗われる（豪は禁止）。雨は強くなる一方だがそれを気にする奴はいない。

海水浴に疲れ、ザックのある場所まで戻る。波音を背にし、BGMは下界の騒音に戻る。感傷に浸るのはそこまでだ。なぜならここが新たな出発点なのだから。旅の終わりはまた新たな旅の始まり。そして、山の終わる場所は山の始まりなのだ。そう、僕は再びこの地に戻ってくる。始まりと終わりの場所、日本海・親不知へ。

(4:00起床 5:30発 ~ 10:10坂田峠 ~ 12:10親不知 ~ 14:00
親不知駅)



北アルプス J 走 総括と反省・感想

高橋昭彦

とにかく天気良かった。新人合宿が悲惨だっただけに超強力な低気圧男が入ってきやがったなあと、出発前は天気にはらはらす毎日であった。蓋を開けたら連日のドピーカン。降られたのは僅か二日間だけであった。おかげで景色は言うことなし。J 走をやった甲斐があったものだ。ガスられた日には空しさ 100 倍だし。この天気のおかげで、僕として見せたかった夏山縦走の醍醐味であるところの展望は、心ゆくまで楽しむことができた。ただ、悪天候に対する危機感や対応はまだまだなので今後の山行で意識してほしい。

一年生は連日の長時間行動にも耐えよく歩いた。夏の体力に関しては自信を持っていいと思う。但し、自分の弱点もそれぞれ見えたと思うので、更に強くなって欲しい。まだまだこれよりも厳しい修羅場はたくさんある。

生活技術については後半はかなりだれてしまったと思う。一年の気を引き締められない僕の責任でもあるが、こうしたものをおざなりにしてしまうとどこかで痛いしっぺ返しがあるので、一年は強く反省するように。これについてはもう少し厳しくしても良かったと思っている。

また、今回は豪の足の件で唐松山荘の方に大変お世話になったが、これだけが唯一の心残りだ。今回の J 走は久々のお馬鹿パーティーともいわれ、出発前から人間関係にはかなり気を使ってきたつもりだ。しかし、それに気を取られすぎていたために、本来気遣わねばならない体調面が杜撰だった。昨年冬の合宿の事故で佐藤さんがおっしゃっていた「一年生の指導に不可能は無い」という言葉を深く噛み締めている。貴重な薬まで持たせていただいた唐松山荘の方にただ感謝するのみである。豪は今回の件がどのような意味を持っているのか、よく考えて欲しい。

僕自身の最大の反省は、勝負山行と言っておきながら一年に対する事前の指導や上級生に対する説明を欠いていたということだ。一年の体の癖を予め把握しておけば怪我などは未然に防げただろう。また、自分の面倒すら見切れない一年に余分なものは持ってこさせなかった。僕は伊那のため一年とのコミュニケーションが不足しており、細かい点を見過ごしていた感がある。また、上級生に対してももっとこの山行の意義や位置付けを説明しておくべきだった。差し入れをくれるのはありがたいが、面白半分でくれるものが大半だ。今回もふざけているとしか言いようの無い差し入れがあったが、正直自分の山を侮辱された気分にもなった。もし、大糸線の車内の出来事のために山行が中止になったら、おそらく BOX の窓ガラスが 2~3 枚無くなっていただろう。なんにせよ

そこまでの本気オーラを伝えることができなかつたのが反省であると共に、伝わらなかつたことが非常に残念である。

- ・ 他にもタクティクスなど失敗があつたが、一年はそれを来年に生かしてもらいたい。まあ、ガチンコが一日もない縦走は認められないけどね。

なににせよ、完走できて本当に良かった。どれくらい一年に伝わつたかは知らないけど、このJ走で僕が伝えなかつた夏山の楽しさ、醍醐味、そして山に対する姿勢は全て伝えることができたと思っている。なぜなら僕自身山に対して全力で向き合うことのできた13日間だったのだから。今回各々が感じたことを今後の山に生かし、この旅のゴール地点であつた親不知がそれぞれの新たなスタート地点になれば立案者としては幸いである。

最後になりますが、留守の上級生と僕らがいないためにサマテンの撤収を手伝って下さつたOBの皆様。そして山行中心配していただいたOBの皆様。ならびに唐松山荘の方々に深く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

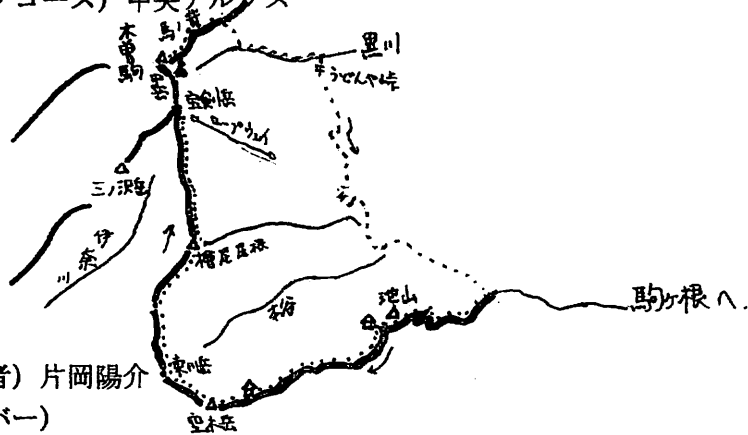
Atto-T

初！一年生山行

仲良く行こうじゃあないか

(山行期間) 9月11日～13日

(入山地域・コース) 中央アルプス



(山行責任者) 片岡陽介

(山行メンバー)

片岡陽介 (理1・会1) 佐山鉄平 (理3・会1) 山中豪 (農1・会1)

(山行内容)

9/10 登山口へのアプローチ

鈴蘭荘：8:45 就寝：10:45

この日は朝から準備を始めたが初めてということもあり少し時間がかかった。準備が終わりいざ出発。とその前にOBの方からありがたいお酒をいただいた。しかも濁りでした。そして駒ヶ根の鈴蘭荘まで車でいった。そこでその日の夕食キムチ鍋を作って食べたが、これまた時間がかかってしまった。そのあとすぐに車の中で寝た。その夜は雨が降った。

9/11 色付きカンバに包まれた空木岳避難小屋へ

出発：8:00 自然観察棟：10:30 旧池山非難小屋：11:05

新池山非難小屋：11:45 大・小地獄：13:45 空木岳非難小屋：15:40

車の中で目を覚まし、朝の空気を吸うべく前夜の雨に濡れた地面に立つ。湿った空気を胸に吸い空を仰ぎ見る。すると西の空には青の色が浮かんでいた。いそいそと朝飯(狐うどん)の準備をし食べた。味が薄かった。茹で汁で食べている気分だった。そんな満足できぬ朝食を終え出発。

雨に濡れ、生気を滾らせた樹林帯に行く。何回か道路を横切り、スキー場を右手に行く。尾根へ取り付くところでは地形図との相違もあったが分かりやすく道跡があったので難なく進む。しばらく尾根伝いに行くと四阿と駐車場があった。トイレもあったので、やっと

お目覚めの腸に一仕事させた。そこからの道も少し変更があったが散策コースとして綺麗に整備され道標もあったので迷わず行く。栗や色付いた落ち葉などの秋の気配を感じながら歩いた。ずっと散策コースを歩くのもつまらないから旧道に入ってみた。距離は短いながらも藪こぎをしながら進んだ。旧道は溝が残っているだけで完全に笹に覆われていた。開けたところには動物観察棟があったが登山道から少し離れ定置していたので寄らず、そのまま池山トラバースの道に進んだ。池山山頂をほぼ横に見る感じで谷へ下る道がある。それを100メートルほど下ると旧池山避難小屋跡があった。パイプで引かれた水場があったが、その脇を流れる清流の水も飲めた。流れに顔を出した石に苔がむしていて美しかった。ただテントを張るには解体されたまま残された小屋の材木が邪魔だった。更に谷をつめると登山道上に、水量豊富な水場が出てくる。そこから右を見ると、笹藪を挟んで50メートル先に新池山避難小屋がある。避難小屋の近くにも水場があり、小屋自体も新しく綺麗だった。小屋というより別荘みたいだった。テラス有り電気もついた。そんな心地よい小屋ともお別れしていくつかの無名ピークをトラバースする。そして少し痩せた尾根を歩く。大地獄・小地獄を通過するとき少しガスってはいいたが、梯子や鎖があり思ったほど危険ではなかった。そして長い樹林帯尾根歩きが続く。いつの間にか谷側への道に入っていて空木岳避難小屋が近いと気付く。ここまで高度を上げるとダケカンバは黄色に、ナナカマドは赤へと色を変え始めていた。このころには再び青空が見えてきて愉快的な色の共演となった。ただもう少し遅くに来るともっと赤と黄がはっきりして良かったかもしれない。そんな多色の世界を進むとようやくこの日の寝所が現れた。テントを張ろうとしたが植物保護のため・・・との看板がありやめにした。いや小屋に泊まれるなんて幸せだった。夕飯のメニューはすいとん豚汁。すいとん粉の混ぜ方を失敗し、メンバーの佐山、山中両君に怒られてしまった。夕飯を食べ終わり寝る用意ができるとOBから賜った酒を暮れゆく空に伸びる入道雲を眺めながら飲んだ。「今からあの雲色付くぞ。」「いやもう夕焼けは終わったね。賭けるか？」なんて話しながら・・・

その夜は星もよく見えた。

9/12 白い岩肌際だつ空木岳～檜尾～天向く宝剣～中岳へ

出発：5:30 駒峰ヒュッテ：6:15 空木岳：7:00 木曾殿山荘：8:20
東川岳：9:15 檜尾岳：12:05 三ノ沢分岐：15:00 宝剣岳：15:30
中岳：16:00 天場：16:25

小屋の小窓が少し明るくなった頃、朝飯（雑炊）を食う。失敗した。本当に失敗だった。酒米でぞうすいをすとお粥以上にデンプン質がすごくなり朝に食べたものでなくなるのだ。みんなグロッキーになっていた・・・と思ったら生き残りが一人いた。彼に残った全てを任せてしまった。

そんなわけで少し出発が遅れてしまった。それが幸いしたというのか我ら一行は朝陽を浴びた紅葉の中を歩けた。朱い・赤い・紅い、朱いが一番良いだろう。何もかも、もとの

色に朱いフィルターが覆い被さった。

駒峰ヒュッテは人で賑わっていた。三人とも出すもの出していたら時間がかかってしまった。そこからの登りは多くの人の足音を聞いて登るものだった。山頂では南アルプスや富士山をバックに写真を撮る人（若い人は殆どいない、なぜ？）で溢れていた。空木岳の下りは岩が結構剥き出しになっていて少し注意すべき所だった。その下りで初めて若い人に会った。やはり同世代がいると何かと嬉しいものだ。少しばかり会話して更に下る。木曾殿越にある木曾殿山荘から少し（六分）行ったところに義仲の力水という名水がある。コップまで用意されていて気持ちの良いところだった。陽に照らされる水飛沫というのはいつ見ても綺麗なものだ。山荘のところまでいそいそと帰ると残っていた二人はおじさん（ペースが同じくらいで後々まで抜きつ抜かれつの関係。）と会話が弾んでいた。私もそれに加わり、しばし休息。その後東川岳の急登を超えいくつかの小ピークと熊沢岳を歩いた。一度小ピークを檜尾岳と勘違いしてしまったが長い尾根が伸びていないことですぐに分かった。檜尾岳では木曾殿で会ったおじさんに再会した。それから東を眺め、OBの方が亡くなられた檜尾尾根の方に向かって挨拶をし黙禱を捧げた。なんだか不思議な感じがした。自分と同じ年頃の人がこの場で亡くなったんだと思うと・・・

檜尾からの下りは旧道に入ってしまったようで道が灌木に押され狭くなっていた。更に行くとは完全なハイマツとクロマメノキこぎになってしまった。道が狭くなる前には平らで且つ開けたところがあり、いざって時ビバークできそうだった。檜尾の避難小屋を使った方が良かったろうが・・・。ともあれ道を修正し再び上り下りを繰り返した。段々道に岩が露出してきて前方に岩群、宝剣が見えた。右には平らな千畳敷が、左には三沢岳に伸びる尾根も見えた。この辺には、ロープウェイで上がってきたようで、ものすごく軽装な人（寧ろ手ぶらと言った方が・・・）がいた。散歩コースとしても良いところかもしれない。ただ交通費が・・・。大きな岩を超えまた岩を超え、「どうしてこの岩はこんなとび出した状態で落ちないんだ？」などと思いつつ進んだ。その時である。かの稀にしか見られないというブロッケン現象を見たのは。私と前を歩いていた山中の影が光輪に包まれて見えた。こんな若輩者の影ですら神々しく見えてしまったのは奢りであろうか？得意になって黄金の夕靄の中を三人は切っ先を目指す。濡れていたなら少々怖いなどは思ったが、黄色に光る乾いた岩は我らの足をしっかりと捉えてくれた。気持ちの良いままに頂上に着いた。そこには祠があり宝剣？を祀っていた。しかし一番の高いところは山頂にある細長い岩の上だ。怖かったがその上によじ登り矛先を感じた。ああ、これぞ優越・・・。

そこからの下りも注意を怠らずに降り、気分の高揚のせいであつという間に宝剣山荘・天狗荘着いた。水場のことを聞きたかったが、天狗荘は人の気配なく締まっていた。中岳への登りはトロトロと気持ちよかった。中岳山頂にも剣が祀ってあった。ハーケンで打たれた、ボルダーにもってこいの岩があり、少しばかり挑戦したが負けた。結局中岳の頂点には立てなかった。南側に目をやるとその日我らの泊まる天場が見えた。「中岳と木曾駒の間ならどこでもテント張れるよ」おばちゃんと言っていたのを思い浮かべた。本当にそこら

のだろう。その石をうまい具合に飛び移りながら気持ちよく下った。途中で夫婦の滝(?)というのもあった。何でそんな名前なのかと考えていたが、後から考えたら確かに二本並んで水が落ちていた気もする。ここらの下りは人があまり通ってないためあまりいい道とは言えない。ただ景色や雰囲気は抜群だ。黒川との出合で一本をとりながら木苺を食べた。甘みもあり香りは金木犀の様ないい匂いがして美味かった。確かそこにも清流が流れていた。本当にここら辺はこの時期水には困らない。川沿いにしばらく下って行くと渡渉点があった。特に橋のようなものは無かったがひよひよいと渡れた。ここから先うどんや急登につき渡渉後一本。そこでうどんに負けないように佐山がソバガキ作って食ってたけどまずかったようだ。俺も食ったが正直美味くなかった。そんなもので力をつけた気になって一気に上りきる。うどんやがあると信じて・・・。途中にいっぱい苔を見た。山中はクモの巣に対抗するために顔の前で枝をびよびよと揺らしていた。さあ頂上だ。何も無い。苔の付いた倒木だけ。ちょっと峠が崩れてる。もしや・・・うどんやは下に落ちてしまったのではないかと・・・と思った。他のメンバーもそう言う。しかし下を見ても何も無い。どこ行ったんだ?うどん屋は。もしやそんなもの存在しないのかも・・・と思った。後で聞いたのだが佐山・山中両君はそんなものあるわけ無いだろ、崖下に落ちたって言ったのは冗談だよ。と言っていた。別に俺だって絶対あるなんて思ってなかったさ。ただあればいいなって願望レベルに思ってただけさ。仕方ないからうどんは諦めてラーメンを作って食べた。うどんや峠に対する当てつけの様に。そこからの下りはふかふかした針葉樹の落ち葉の上をもそもそと歩く。とても歩きやすかった。そして砂利道に出てしばらく行き車道に出る。そこで運動靴に履き替え少々長いアスファルト道をひたすら歩いた。温泉街で佐山の車を待ち、着替えを持って温泉湯けむり館へ。一風呂七百年に高いなあと文句を言いつつも、あそこまでゆっくりと露天風呂を楽しんだからいいかと満足。帰日も佐山一人に運転を押し付けてしまった。なぜなら僕ら二人は免許なし。早く取らないとなあ。運転ご苦労様。そして松本に帰って三人で寂しい晩餐会。メニュー：サラダバー 以上。しかし満腹。

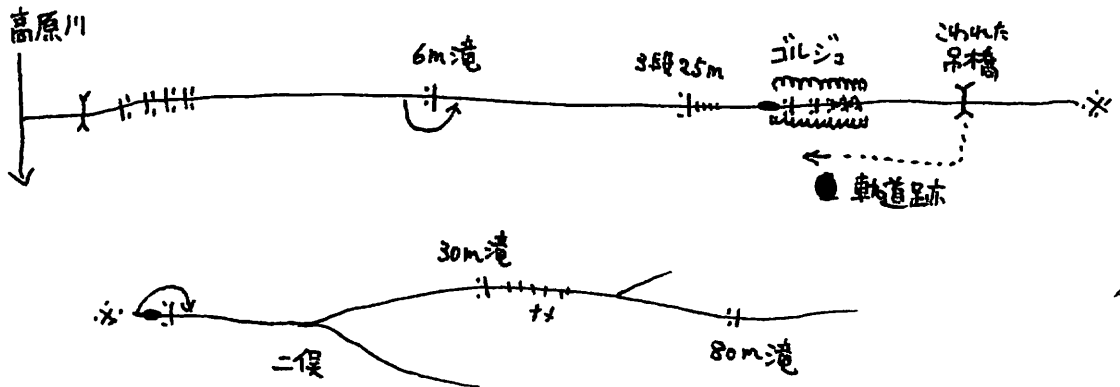
上級生の山行自信は無かったがそれなりに楽しめたし、うまくいったと思う。

中央山行
好きよ♡
kataoka

高原川 赤谷

L 三森武志 横山勝丘

概念図



2004年9月15日 快晴

8:00 国道発～11:10 壊れたつり橋～12:05 二俣～13:40 80m 二段大滝～14:55 二俣～15:40 壊れたつり橋～17:35 国道

計画では1泊の予定だったけれども1日で行っちゃおうということで急遽日帰りに。片寄さんを上高地まで送りつつ、栃尾から国道を南下する。国道脇の広いスペースに車を止めて出発。赤谷へは高原川を突っ切って入る。しかし前日の雨の影響か、渡渉でいきなり股まで濡れる。覚悟してなかったのになんだかとても損したような気分になった。どうせゴルジュでびしょ濡れさと開き直って赤谷へ。堰堤をいくつか越えようと、快晴ということもあって木漏れ日で沢がとてもきれいだった。それを楽しみながら、ついでに今日はどこまで行けるかなと考えながら歩いた。そのうち遡行図で登れないという6mの滝に着く。記述どおりに登れなかったのでも右のルンゼから高巻く。本流に戻る前に1回懸垂らしかったけれど灌木をうまくつないだら何とかロープを出さずにいけた。その後もちよくちよく出てくる小さな滝を越え、黙々と歩き3段25m滝を難なくこなしてやっと今日の核心であるゴルジュにたどり着く。

今回はゴルジュ突破が目標みたいなものだったので、寒そうではあったが当然つこんだ。まずは深いトロと15m滝。トロは流れが速すぎて流れの中じゃへつれないので、滝近くまで右岸沿いに行きそこから滝を登った。いきなりびしょ濡れで奥歯がかみ合わない。次は6mの滝でどこから登ったものかと思案して、とりあえずロープを

出すことにする。よくわからないので近くに行って見てみることにして急流をむりやり進んで滝直下までいく。するとあらまあ穴が開いていて滝の下をくぐっていった。残す滝もあと一つだったが、いかんせんさっきので全身くまなく濡れて二人してブルブル震えていた。しかもまたもや急流の泳ぎ。気分は萎えたがここはいつちよ気合を出し、泳ぎの嫌いなジャンボさんをよそに一人つつこむ。寒さでちょっぴり感覚がなかったけれど、簡単な滝ですぐに上がれて晴れてゴルジュ突破。ああ短かったが寒かった。そのあと寒さを吹き飛ばすように二俣までひたすら歩く。

二俣に着いてまだ時間があったので左俣をさらに遡行することにした。30mの滝を高巻いてからはだんだんとナメっぽくなっていき、ナメ滝も出るようになってきた。そういえば左俣の中間あたりまでジャンボさんは十数匹もの岩魚を見つけていた。あつ、いた！と言われても二番手である自分が見るころにはすでにいなくなって、なんとも悲しかった。そして終点の80m大滝に着く。ちょろちょろと水量はなかったが大きいだけあって圧巻ではあった。ここで引き返し、来た道に戻る。壊れたつり橋まで戻り、そこから左岸を上がって軌道跡を見つけ、それをたどって下る。昔はトロッコでも通っていたのだろうか。そんなような跡があり、今でも登山道並みに広い道が通っていた。おかげで1時間で芋生茂集落についてしまった。国道をいくらか歩いて車まで戻り、温泉とゴリラを経由して帰松した。

結局は1日で大体回れたわけで、1泊にしてたら逆にやることなくて暇だったような気がする。急ぎ足でちょっとせわしない感じもしたが日帰りで全部回ってこそ面白いと思う。軌道跡もあるからちょっとくらい遅くなくても問題ないはず。今回は初？ゴルジュでちょっと興奮気味でもあった。一つも巻くことなく行けてよかった。びしょ濡れで寒かったけどゴルジュ行くなならそれなりの装備とか必要なんだろうか。ウェットスーツとか。邪道かな？よくわからん。

ちなみに全身濡らして丸1日行動し、その上温泉入っていったために帰り道で二人して眠りそうになってやばかったというオチがついてしまった。

編集後記

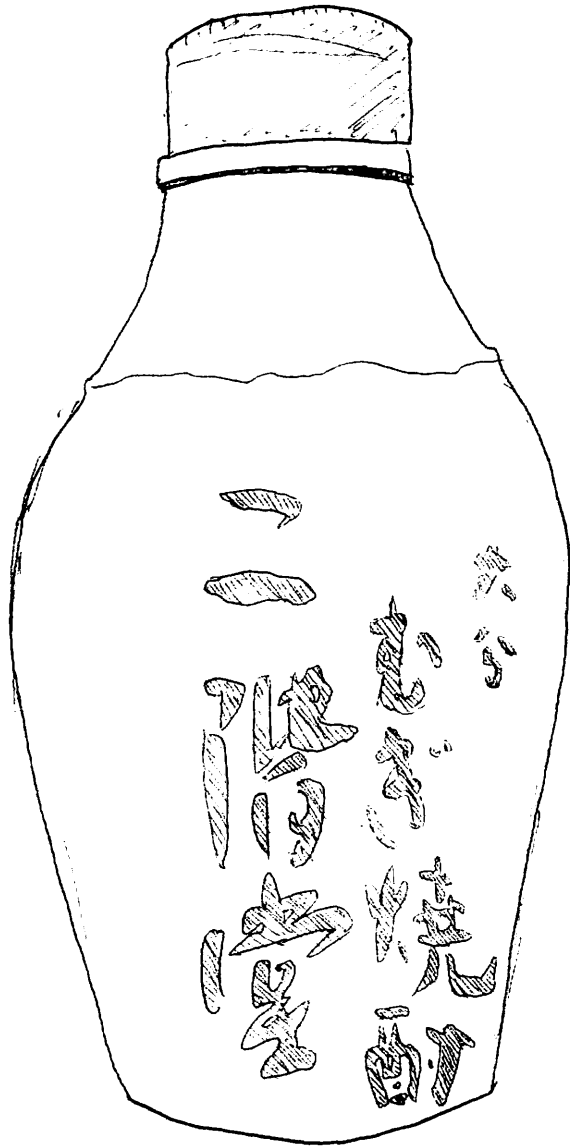
今期も結構行きましたなあ～。

この他にも編集に間にあわなかつた無雪期後半の山行が3つ。あと特別版として高橋の日本縦断、コーヤのヤブシリーズ
アルプス

(乗クラ、深南部)はそれぞれ別冊にて発行予定です。雪をかぶつた山々が見られ始めました。季節は冬に向かっています。でも私達の魂は熱く燃えあがるばかり

りであります。待っておいよ冬山!!

コーヤ



酒は友なり



SAC